INTERVIEW

連載企画「九州大学で活躍する女性研究者」

第4回は人文科学系で科研費基盤Aの代表を務める福田千鶴氏です。

福田　千鶴

専門分野：
日本近世史

御家騒動から鷹狩りの研究まで

私は卒論で書いた福岡藩・黒田家の御家騒動に始まり、豊臣から徳川に至る江戸時代の歴史を専門にしている。現在は、科研費をいただいて全国の研究者とともに鷹狩り文化が日本の政治経済や環境に与えた歴史的な役割を研究中。日本の御家騒動を分析していくと、必ず鷹が出てくる。それは、鷹が王権や領主権の象徴だから。もとは天皇の権限だった鷹狩りを武家が掌握していくようになったのも、豊臣から徳川にかけての時代。モンゴル発祥とされる鷹狩り文化が、世界各地にそれぞれのスタイルで伝播していったが、日本にどのように伝わってきたのかも、これからの研究で明らかにしていきたい。

歴史学は一人前になるまでにすごく時間がかかる学問。現代に残された多くの古文書や史料をどれだけ集められるかが大事だが、すべての史料を集めるのは不可能だし、すべての史料が残っているわけでもない。見えないところをいかに見るか。歴史研究者の資質が問われるところである。

日本史学は完全な男性世界だった

私が大学を出た頃は女性の歴史研究者は数えるほどで、特に日本史学の世界は完全な男性社会だった。大学院に進もうとした時も「女性は研究者になれない」と言われ、一度地元銀行に就職した悔しい経験がある。九州大学の人文系では、西洋史や東洋史を含めても日本人の女性の歴史教員は私一人しかいないのも寂しい。研究で旧家に行って文書を見せていただく際にも、「女には触らせない」と言われたこともある。それでも女性の先輩方が直面した困難に比べれば、私たちの世代はまだ恵まれている方だと思う。

女性であることはマイナスではない

今後さらに女性研究者が増えるためには、小さい頃から将来は学者になりたいと思う女子を増やすことが必要。そのためにも、女性研究者の成功モデルをもっと示し、研究の「楽しさ」を伝えることが大事だと思う。

若い研究者には、ネットワーク作りの大切さを伝えたい。特に人文系の学問は個人ワークが基本だし、女性だと男性の輪のなかで孤立しがちになる。自分から積極的に頭を下げて、人とのつながりを築いておけば、いずれ大きなネットワーク作りにつながる。これは若い時にしかできないことだ。

また、女性研究者はいたるところに転がるジェンダーバイアスで苦労はすると思うが、それを逆手に取るくらいのしなやかさを持ってほしい。女性であることは絶対にマイナスではない。豊かな発想力を強みにして、研究のモチベーションを保ち続けてほしいと願っている。

福田研究室所蔵の古文書

略歴

九州大学 文学部史学科卒業。同大学院文学研究科博士後期課程中途退学。国文学研究資料館・史料館助手、東京都立大学人文学部助教授、首都大学東京都市教養学部准教授、九州産業大学国際文化学部教授を経て2014年から九州大学基幹教育院教授。

以上、インタビューの一部を紹介しました。研究の詳細やワーク・ライフ・バランスのお話など、全体については男女共同参画推進室のホームページからご覧いただけます。